

アイレの饗宴 (by 井口由美子)

エスペランサ特別企画ライブ

[4月5日／東京（高円寺）エスペランサ]

【バイレ】 渡部純子／萩原淳子／三枝雄輔

【ギター】 片桐勝彦

【カンテ】 川島桂子

2010年にスペイン・ロンダのコンクールで外国人として初めて優勝した萩原淳子さん、そしてスペインに二十年間在住し、バルセロナの老舗タブラオ「ロス・タラントス」でトップダンサーを十二年務めた渡部純子さん。本場で研鑽を積み、認められたバイラオーラの競演は想像以上の迫力だった。

萩原さんの濃厚なソレアが忘れられない。踊りの前半、彼女は怒りの表情で空気を支配していく。それは単に私的な感情ではない。私自身の、そして多くの人々の心の中にある、抑圧するものに対する憤りである。そういったものをすべて一手に引き受け、象徴するたくましさ、萩原さんにはある。スローに広げられるブラソは突破口を求めているかのように限りなく伸ばされていく。そのままじっくりとタメをつくりながら舞われるケブラーダ。その動きにはマグマが地中深く対流しているような大地の息づかいがある。そして萩原さんの情熱と私たちの潜在意識が共振した瞬間、彼女の表情は微笑みに転じる。その笑顔には、高みに向けられた明るい意志がある。胸の内に沈めていたものに光が降り注がれる。そしてそれらは浄化され、空へと舞い上がっていく。人の歌声を聴いているときは自身の声帯も自然に動き、舞踊を観ているときは自身の筋肉も知らず知らずのうちに動いているという。それと同じように、萩原さんのおおらかなアイレは観ている人々の心にシンクロして、抑えているものをともに解き放ってくれる。そのアルテは広大なロンダの地で育まれたものだろうか。ロンダをいつか見てみたい。萩原さんの踊りを観てそんな想いを抱いた。

渡部さんの艶やかさもまた印象深い。第一部の冒頭からコケティッシュなグアヒーラで観客を釘付けにする。オレンジ色のサテンリボンで背中をきゅっと絞った純白の衣装に身を包み、渡部さんはしたたかな女らしさを見せてくれる。そして第二部では燃えるようなソレアでライブの最後を飾った。エキゾチックな美貌が真紅の衣装に映える。スペインの陰翳を感じさせる踊りでぐいぐいとコンパスを引っ張っていく。本場仕込みのプリミティブな力強さ

を保ちながらも洗練された美しさを宿しているフラメンコだ。その強い求心力で初っ端から観客を十分に惹きつけていながら、クライマックスに向かってさらに上昇気流に乗ったかのように盛り上げていく持久力と瞬発力には驚かされた。しなやかで細い身体に潜む底なしのパワー。これが本場の老舗タブラオで鍛えられたプロ魂なのだろう。

そして粋でやんちゃ、破格のサパテアードで大胆な切り込みを見せるのは三枝雄輔さんだ。潔い突き抜け方に胸がすく思いがする。

三者三様の個性のぶつかり合う舞台からは風圧さえ感じた。そこにはいわゆる日本的な協調というものはありません。強烈なカラーがそれぞれに輝きを放ち、拮抗することで、スリリングなライブを形成していた。

絶妙なタイミングでハレオが飛び交う、異国にいるような熱い雰囲気の中で、ギターの片桐勝彦さんもカンテの川島桂子さんも水を得た魚のようにいきいきと音楽を創り出していた。とくに川島さんの声はいつも増して伸びやかで充実していた。

もうひとつ、フラメンコを強く感じさせてくれた光景がある。勢いよくパルマを打って後方から盛り上げながら互いの踊りをじっと見守っていた、萩原さんと渡部さんの真剣な眼差しである。